

福島第一原発事故が自傷行為に及ぼす長期的影響 —COVID-19 パンデミック期における年齢・性別による異質性の分析—

加藤 穂高¹

<要旨>

CBRNE（化学・生物・放射性物質・核・爆発物）災害は、通常自然災害と比べて心理社会的影響が大きいですが、発生頻度が低いため、メンタルヘルスへの長期的影響に関する実証研究は限られています。本研究では、2011年の福島第一原発事故と2020年からのCOVID-19パンデミックという2つのCBRNE災害を経験した日本において、これらが自傷行為の発生率に及ぼした長期的影響を検証した。

2008年から2023年までの救急搬送データを用い、原発からの距離を処置変数としたイベントスタディ分析を行った結果、原発事故後、福島第一原発に近い地域ほど若年女性における中等症・軽症レベルの自傷行為が継続的に増加していることが明らかになった。さらに、年齢階級別分析により、25-34歳女性では2015年以降継続的に増加している一方、15-19歳女性ではCOVID-19パンデミック期に特に顕著な増加が見られた。

この世代間差異は、災害影響の異なるメカニズムを示唆している。25-34歳女性の継続的増加は、子育て世代における放射線被ばくへの懸念や長期的なメンタルヘルス悪化を反映していると考えられる。一方、15-19歳女性のパンデミック期における顕著な増加は、原発事故時に幼少期だった世代が、パンデミックという異なるCBRNE災害に直面したことで、自傷行為が顕在化した可能性を示唆している。

本研究は、(1)準実験的デザインでCBRNE災害の長期的影響を検証した点、(2)複数のCBRNE災害への二重被災がメンタルヘルスへの影響を増幅させる可能性を実証的に示唆した点、(3)自殺ではなく自傷行為に焦点を当てることで災害とメンタルヘルスに関するより包括的な理解、に貢献するものである。

キーワード：CBRNE、福島第一原発事故、COVID-19、自傷行為、トラウマ

JEL：I12, I18, Q54

¹ 一橋大学大学院経済学研究科博士課程